

裏の維新史にも光を

「徳地の隊中様」山口で供養祭

明治維新直後の脱隊騒動で命を散らした地元若者らを弔う「徳地の隊中様」供養祭が、山口市徳地堀の徳地山村開発センターであった。徳地幕末維新歴史放談の会(山田文雄会長)が維新150年の節目に初めて企画した。

市内外から約60人が参列。山田会長が「地域で誰も話したからない情報を持ち寄り、ようやく歴史の表に出すことができたとあいさつ。市内の歴史研究家、樹下明紀さんが記念講演した。

樹下さんによると、戊辰戦争から凱旋した奇兵隊をはじめ諸隊の隊士の多くは禄制改革で恩恵にあずかれず、士族中心の常備軍編成で解雇され

た。不満を抱いた隊士が集結したのを反乱と見た藩政府が鎮圧に乗り出した。当時各地で起こった農民一揆と結び付かないよう見境なく捕縛したことから、樹下さんは「徳地の志願兵となぜこんな人までもと思われる処罰は検証する必要がある」とした。

徳地仏教団の7カ寺から8人の僧侶が駆け付け、奇兵隊が本陣を置いたところがある正慶院の田中正道住職が本導師となって読経。参列者一人一人が特設祭壇に手を合わせた。慰霊の盆踊りとして今夏、口説きなどを新しくした「徳地甚句」を同会会員が披露した。

同会などによると幕末、諸隊に入って従軍した農村民兵らを民衆は敬意を込めて隊中様と呼んだ。脱隊騒動は中央の新政府に顔向けできないと思った藩政府が抑えつけたため、あまり表に出てこないという。



徳地の隊中様供養祭で手を合わせる参列者たち＝山口市